陽炎の消ても草のにほひ哉　秋田　落山
ひとつかみ蚊遣もくへて初月夜　徐風
漁りも手明になりて瓜の花　嚮斎
鶯や野風吹入窓の先　雪貢
藪入の貰ふて来るや里の梅　可慎
遠浅やほの〳〵明てはつ霞　大古
苗代や漣よせて日の暮る　鶴汀
見て後に聞こと多し薪能　喰風
小御門のうちも月夜や猫の恋　素山
老の手に覚束なしやさし柳　御風
鶯や百囀りにかゝはらす　松前　而先
月澄は露けくなりぬ麻羽織　陽山
小男鹿の道も打消す畑かな　巳有
ひと手前仕舞て聞や初蛙　耕雪
初午や村の名に呼ひと構　旭
汲水に影を移して初烏　此君
白雲の花に消込真昼かな　江差　淇山
下萌や垣根〳〵の日の力　素元
牛も向き車もむける恵方哉　馬郷
朝風の凪待ふりや草の蝶　雪暁
うしろから夜の明にけり四方拝　砂山
流るゝは鷗斗りそ春の海　麁文
眼うつりの草木もなくて柳かな　箱舘　北崖
小屏風に見し貝のある汐干哉　三千丸
草餅に栞はさむや写しもの　几田
初蝶や野はみとりなる雨上り　和好
門松の雲に照り合ふ翠かな　山方
爰かしこ風をり〳〵や花さかり　赤甫
初花や夜もそれほとにくらからす　茶瓢
晴口や柳の雪のひとけふり　三幹
風も日もゆるむと見えて落椿　蘆城
露の音聞か果しや夜の花　峰女
酒あはゝ酔しる月の朧かな　武蔵　亀なり
人は花連れる子供に眼のうつる　山祐
小雨せし朝戸や終にはつ桜　遊里
居守の木戸もゆるさす糸さくら　光哉
みな山は同し一重のさくら哉　南甫
怠りて朝の戸遅き燕かな　錦上

枯草の雨に減り行土筆哉　壷三
手にとれはさなから淋し落椿　文濤
明の鐘かすみの中に聞え鳧　雨考
海棠や朝寐のすきて人の来る　冨丸
舟に寐て柳の夢も拾ひけり　鶴丈
子の世話になるも嬉しや初桜　生徳
夕霞すくに朧の梅もある　春道
若草のある処斗り雪間哉　東雲
明る戸に近く見えけり雪のやま　山鳥
人さとへかへす風あり山さくら　可久
おくれしも咲と揃ひぬ福寿草　花外
夕月の梢に寒しやまの梅　山翠
春の日や蝶もなくさむ潮かしら　古昇
眼心の及ぬかたも華の春　素竹
薄墨の隈ある月や軒の梅　五渡
空はまた星の寒さや山さくら　下毛　茂精
吹かはる風の向ふやはつからす　和南
蜑の子も言葉かさりて御慶哉　錦袋
薄らとけふり離れて遠やなき　文窓
なる丈は我手て仕舞ふ雛かな　上毛　心星
ひと工み持て鳴やむ蛙かな　草渉
かくまても心しつけし花の春　木公
掛もの、反りも直らぬ余寒哉　琴堂
をしまねは長き寒さの名残哉　逸渕
たる事の初めや梅に三日の月　上総　惟馨
鶯の高音に消るくもり哉　下総　双岳
露乾く木の間や蝶の羽軽き　錦糸
飛退て鶏のうたふや桐一葉　素月
落てある梅の莟や春おろし　常陸　鶴巣
御降りや心祝ひの小酒もり　友甫
清水くむ道のゆかしや花の中　最上　金英
をし鳥の中もへさてる霞かな　石鼎
蝶々や身の重さうな雨のあと　雲晴
伸し日に心つきけり春の雨　龍海更　一賀
誉めなから戸口に寄るや春の月　梅幹
登る人斗り見えけりはるの山　江流
初花にこゝろ遣ひや宵の雨　旭峰
かすむ日や草臥のつく馬のうへ　中龍